

名号をわしが
称えるじやない
わしに響いて
ナムアミダブツ
妙好人 浅原才市翁



No. 80

2010年(平成22年)
3月1日
発行
浄土真宗本願寺派
和歌山教区日高組
責任者
鈴木悟峰



第15回 真宗法座

阿弥陀経に聞く

法音
このもろもろの鳥、昼夜六時に和雅の音を出す。その音、五根・五力・七菩提分・八聖道分、かくのごときらの法を演暢す。その土の衆生、この音を聞きをはりて、みなことごとく仏を念じ、法を念じ、僧を念ず』

この五や七や八は、さとりの智慧を得るための実践修行の方法をまとめたもので三十七あります。足したら二十五なのは表現上省略されているからです。

五根とは、信と精進と念と定と慧です。五力とは、悪を止どめる力です。七菩提分とは、菩提に至る因行です。八聖道とは、正見・正語・正思惟・正業・正命・正精進・正念・正定です。

これら三十七は小乗の教えです。小乗の教えをどうして大乗の阿弥陀経で説かれているのかといえば、法藏菩薩の因位の修行は大小乗を究竟させているのです。阿弥陀さまは、大乗も小乗も包括されているのです。阿弥陀仏の功徳の一部を挙げて全分を讃嘆されるのです。

風の声
一舍利弗、かの仏国土には微妙吹いて、もろもろの宝樹および宝羅網を動かすに、微妙の音を出す。』

極楽には、清々しい風が吹いているのです。この風に当たつていると、仏法が自然に聞けるというのです。その利益をあきらかにしています。

学校に行って、先生の言葉を聞いて、それに馴染むのは、そのわけがわかるやどうだというより、またどんなに本を読むのよりも尊いと昔教えられました。耳に入つて、いつの間にか身につくということです。法話を聞くことと一緒にです。

本願力の自然の義が成就したすがたです。(永原)

「本願」

大阪の行信教校の教授であります、天岸淨圓先生の本『淨土真宗のキイ・ワード』と言う本の中の「本願」を書き写させて頂きます。

「本願」、親鸞聖人がお伝

えくださった淨土真宗のみ

教えとは、阿弥陀如來さま

のご本願のおいわれである

とお聞かせにあずかってお

ります。そのご本願とは、

どのようななこころを私ども

にお示しになつてくださつ

ているのでしょうか。『無量

寿經』というお經によりま

すと、阿弥如來がいまだご

修行中に、法藏菩薩と名のつ

ておられたとき、万人を一

人ももらすことなくすぐお

う、すなわちこの私をすぐ

わんとおぼしめしになつて

くださいと説かれており

ます。

そしてこの私の生きざま

を真剣に、慈しみをこめて

深くごらんになつてくだ

さつたのでした。そのとき

法藏菩薩のみこころのなか

に、この人間を何とかしな

くては、との思いがおこつ

てこられたのであります。

この「何とかしなくては」

とのおもいこそ、ご本願成

との根源なのでした。

本願

それは、「ねがい」

と訳されます。そのねがい

とは未完成なもの、不完全

なもの、いまだできあがつ

ていないものを、完成させ

てゆこう、完全なものにし

てゆこうとするときにお

こつてくる思いなのであり

ます。ですから、完成され、

できあがつた状態にあるも

のには、ねがいはかけられ

ません。たとえば、幼い子

供をもつ親なればこそ、そ

の子が一日もはやく、元気

で一人前に成長してほしい

というねがいをもつことで

しょう。また、病氣で苦し

い日々を送る人なればこそ、

ご本人も周囲の人びとも一

日もはやくよくなりたい、

回復してほしいとのおもい、

すなわち、「ねがい」がおこつ

てまいります。ですが、病

もなく、健康そのものの人

の上には、よくなろうとす

ることもおこらなければ、

周囲の人びともよくなつて

ほしいとの思いもうかんで

まいりません。同じように、

いくら親であつても三十歳

四十歳と成人した子供には、

ません。まさしく、「ねがい」

とは、不完全なるものの故

におこされ、かけられる心

根であるといえましょ。

ところで、いま、私の生

きざまを見つめてくださつ

た法藏菩薩のみこころのな

る慈悲の「ねがい」がおこつ

かに、「ねがい」がおこつて

きたのです。それはいかな

ことなのでありますよ

と訳されます。そのねがい

とは未完成なもの、不完全

なもの、いまだできあがつ

ていないものを、完成させ

てゆこう、完全なものにし

てゆこうとするときにお

こつてくる思いなのであり

ます。ですから、完成され、

できあがつた状態にあるも

のには、ねがいはかけられ

ません。たとえば、幼い子

供をもつ親なればこそ、そ

の子が一日もはやく、元気

で一人前に成長してほしい

というねがいをもつことで

しょう。また、病氣で苦し

い日々を送る人なればこそ、

ご本人も周囲の人びとも一

日もはやくよくなりたい、

回復してほしいとのおもい、

すなわち、「ねがい」がおこつ

てまいります。ですが、病

もなく、健康そのものの人

の上には、よくなろうとす

ることもおこらなければ、

周囲の人びともよくなつて

ほしいとの思いもうかんで

まいりません。同じように、

いくら親であつても三十歳

四十歳と成人した子供には、

ません。まさしく、「ねがい」

とは、不完全なるものの故

におこされ、かけられる心

根であるといえましょ。

ところで、いま、私の生

きざまを見つめてくださつ

た法藏菩薩のみこころのな

る慈悲の「ねがい」がおこつ

かに、「ねがい」がおこつて

きたのです。それはいかな

ことなのでありますよ

かに、「ねがい」がおこつて

きたのです。それを阿

弥陀如來の本願と申すので

きました。この文章を読ましていた

まにねがわれている自分を

聞かされるとき、私の人生

が、私もつていているより

も、もつと重く、尊く、大

切なものであつたと気づか

しめられ、すなわち、ご本

願とは私に人生、いのちの

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

本願」と申すのです。

また、一人の人間が、一人

前であるかのように誤解し

て生きてゆく、これがもつ

ともあやうい生き方であり、

かつ恐ろしいことであると

いわねばなりません。なれ

ばこそ、法藏菩薩はその私

を何とかしようと思召にな

られたのでした。それを「ご

「お寺さん、おまいり（お経）の後、「コレスナワチ第十八ノ念佛往生ノ誓願ノココロナリ……」の第十八ノ：てなんですか。」この質問を受けるまでどれだけ御文章を拝読してきましたか。少しの時間でしたが法の縁が結ばれたと感じました。日ごろ、法事やお寺まいりで、仏さまに縁の深い者にとつて、なじみの深い言葉です。お寺まいりの少

「念佛生活」

私達はそれに、仕事、娛樂、研修などを、日々の生活で営んでいます。また、その中で仏様に手を合わせ南無阿弥陀仏と称えています。このように、仕事は仕事、娛樂は娛樂、研修は研修、宗教は宗教と曰課を組み、合理的な生活を送っているのではないかでしょう。

私たちの人生、全ての生活は仏様に照らされ、抱かれているのです。ですから、私の都合でお念仏を称えても、称えなくても、私自身はお念仏の中にあるということを忘れてはなりません。

現世の過ぐべき様は、念仏の申されん様に過ぐべし。念佛の妨げになりぬべくは、何なりともよろずを厭い捨てて、これを止むべし。いわく、聖で申されば、妻をもうけて申すべし。妻をもうけて申されば、聖にて申すべし。と法然聖人は説かれました。

法然聖人始め弟子達は聖(僧侶)でお念仏を申す道、しかし、親鸞

聖人は妻帯という道を辿られました。これは出家在家を問わず仏智を仰いでいくことに、念佛生活あるいは念佛の本義があるのだと察することができます。形の上で出家在家という枠を乗り越えていくところに、念佛の本義があるということを実践生活の中で明らかにされようとしたのが法然聖人であります。

法然聖人は妻帯しませんでしたが、出家者の妻帯を認めていました。全ての人が念佛ひとつで救われていくという専修念佛のお心があつたからだと思われます。

(北山通昭)

門徒心得

仏縁に出遇う

た時、四十八の願いを立てられたと説かれています。

おどき話のように聞こえますが、自身のこととして、受けとめることになるでしよう。身近な人の死によつて仏さまとの縁が徐々に結ばれていくのです。人が仏法にふれるとは、仏さまが私にふれていてくださつている姿にほかならぬのです。

「無量壽經」には、阿弥陀如来が法藏菩薩であられました。このように質問をいただけたことに喜びを感じました。

生き様を、心の奥まで深くご覧になられました。そして、この世でもがき苦しむ衆生、生きとし生けるものすべてを救いたいと願われたのです。



者の方の内には、家でも「練習の為にいたいた録音テープを聞き練習を重ねて来た。【和讃】の節（ふし）が難しくて」と話す。

この度の法座で、お勤めをしていただいた連続研修会受講者の皆さん、参拝して下さった皆様に御礼申上げます。来年も同次期に開催する予定ですのでご参加下さい。

「満堂の本堂に「お勤め」の声たかだかに響く」

日高組寺院めぐり



一行寺（日高町比井）
第十二代住職 丸山妙子

沿革

当寺は、昔は真言宗の一寺であったが、文明年間に本願寺第八世蓮如上人の教化を受け、浄土真宗に改宗した。永正八（一五一二）年九月に道場を創建したのが始めといふ。開基、了空法師は、下野国、今の千葉県の銚子から来たと。

当寺では、昭和三十六年より、昭和六十年近くまで、比井崎地区の幼児を対象に本堂で保育所を開いていた。

月日が過ぎ、門徒の数も減つて来た。高齢化で老人ホームに入っている人も居る。行事にお参りする人も少なくなつて来ている。
親鸞聖人の七五〇回大遠忌法要も近づいている。
この機会に、住職も門徒もお念佛の生活を一層高めて行きたいものである。

本尊阿弥陀如来を下付せられたという。

その後 亨保八（一七三三）年四月に本堂、慶応四年（一八六八）年三月に、鐘楼、

昭和十一（一九三六）年に庫裡を再建した。

梵鐘は、安永二（一七七二）年に鑄造されたが、第二次大戦中供出した。

信者が集まつて総意によつて建立された寺ではなく、個人的発願によるもので、近隣の者が帰依し同行となつた。それで門徒数は少ない。

当寺は、昭和三十六年六月に一行寺なる寺号公称の許可を受け、慶安四年（一六五二）年に本願寺より、



親鸞聖人750回大遠忌 日高組お待ち受け法要厳修

- ☆日 時 平成22年4月18日（日）午前10時～午後3時
- ☆場 所 法要会場 蓮専寺（由良町）（午前）・行事会場 光専寺（由良町）（午後）
- ☆法要内容 稚児行列・お勤め
- ☆行事内容 仏教落語「他力本願」・古典落語
- ☆落語家 森乃 福郎

☆昼食を準備いたします。参拝者は、各所属寺へお申し込み下さい。

前号でも紹介致しましたが、4月18日（日）、由良町里の蓮専寺・光専寺の2ヶ寺を会場に開催されます。

この法要には130名程度の稚児が参加し、光専寺から蓮専寺迄を行列することになっていますので、かわいらしい稚児の姿を見に来て下さい。

また、午前の法要（蓮専寺）に引き続き、午後からは光専寺に於きまして「仏教落語」を予定していますので参拝下さい。参拝に当たっては会場の都合で各寺院に申し出て下さい。

なお、落語家 桂 福楽さんは都合により森乃福郎さんに変更となりました。

☆行事報告

・日高組「真宗法座」
昨年十二月十九日（土）日高町志賀、即生寺に於いて日高組第十五回「真宗法座」が開催されました。

「真宗法座」（聞法の集い）は、日高組が取り組む連続研修会が主催して毎年この時期に開催されている法座であります。

現在は八期の連続研修会が開催中で、この度は、受講者十二名による「正信偈」のお勤めの後、ご講師 大阪教区千里寺住職 武田達城師から「親鸞聖人の姿勢に学ぶ」の講題でご法話がありました。表紙の写真はその様子です。

・総代会後期研修会

一月三十一日（日）、日高町志賀、妙願寺に於いて後期の研修会が各寺院の総代が多く参加し、ご講師に、西本願寺から育成研修部課長、疋田師に向かえ、テーマ「浄土真宗について、総代に求めること」の講題で研修会が開催されました。

ご参加頂きました総代の皆様には、ご苦労様でした。

☆行事予定

・親鸞聖人七五〇回大遠忌お待ち受け 近畿大会

三月四日（木）、大阪城ホールにおいて開催されます。既に参加者募集を募り、日高組から四十五名が参加致します。

・日高組「定期組会」開催

三月二十七日（土）、午後2時から日高町志賀妙願寺において開催致します。

「定期組会」に先立ち寺族・門徒総代（責任役員含む）の物故者追悼法要を勤修致します。（該当者有れば）各寺院組会議員の皆様には出席を宜しくお願い致します。

日高組通信